



子宮頸がんワクチンについて考える



庄内町長 富樫 透

新型コロナウイルスの接種率は全国で約80%といわれる中、子宮頸がんワクチンの接種率は約2%です。これは、カナダ83%、イギリス82%、オーストラリア79%、イタリア52%、アメリカ49%と比べても群を抜いて低い数字です。

2013年4月に厚生労働省は、小学6年生から高校1年生の女子を対象に無料のワクチン接種を推奨しました。しかし、一部で副作用の問題が大きく取り上げられ（重症化率は100万回から400万回に1回）、国は同年6月にワクチン接種の積極的勧奨を中止したという経過があります。

結果として、子宮頸がんの発症率はG7の国ではワースト1位、G20の国の中でもワースト5位という数字になっています。そして、年間に1万5,000人の方が発症し3,000人の方が亡くなっている現実があります。

もちろん、ワクチン接種したからと言って100%発症しないという保証はありませんし、原因となるヒトパピローマウイルスは女性の半数以上が1度は感染するものの、ほとんどの方は1年以内に完治するといわれています。

また、男性には関係ないと思っていましたが、ヒトパピローマウイルスを介在するがんは男性も発症し、現在は男性へのワクチン接種も認められています。さらに、2023年4月からは、多くの型があるウイルスに広く効果がある汎用性の高いワクチン接種が可能になったとのこと。お話を伺った産婦人科医の先生からは、「早い時期に正しい情報入手し、後悔しないようにしっかりと判断してほしい」との言葉がありました。まだまだ閉鎖的な分野の情報発信の必要性を、強く感じた機会となりました。